



ジャックと豆の魔木

イギリスの童話
イラスト 北沢 夕芸

むかしむかしあるところに、ジャックという、
やんちゃで、ちよっぴりおっちょこちょいな
男の子がいました。

ジャックはお母さんと二人ぐらしでしたが、
とつてもまずしくて、

ある日とうとう大切なめ牛を
売らなければならなくなりました。



ジャックがめ牛うしをつれて歩いて行くと、

むこうからおかしなようすのおじいさんがやってきました。

おじいさんは、

「おはよう、ジャック、どこに行くんだい？」
と言いいました。

ジャックは

（なんでボクの名前なまえを知しっているんだろう？）

とふしぎに思おもいながら、

「このめ牛うしを売うりに行くんだよ。」
と答こたえました。



するとおじいさんは、何かをとり出しました。

「どうだいジャック、

これとそのめ牛を、とりかえっこしないかい？

これは、まほうの豆でね。ひとばんで天までのびるんだ。」

「…よし、きめた！」

ジャックは、豆とめ牛を交かんしました。

そして大よろこびで家に帰りました。



ジャックが家に帰ると、

お母さんは、カンカンにおこりだしました。

「お前はなんてバカなんだい！」

こんなものと、だいじなめ牛を

交かんしてしまうなんて！」

お母さんはマメをつかむと、

まどから外になげすててしまいました。



つぎの朝あさです。

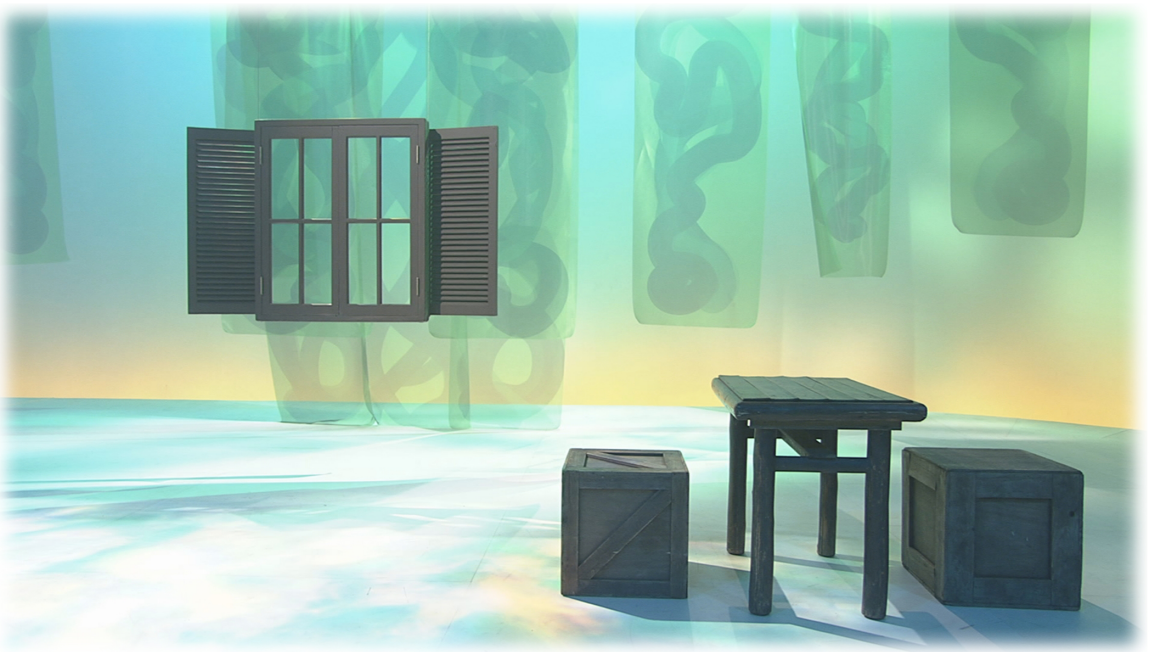
ジャックが目をめをさますと、どうでしょう。

豆まめの木きが空そら高たかくのびて、

あたりがうすぐらくなっていました。

「あの話はなしは本当ほんとうだったんだ！」

ジャックは、まどから木きにとびうつり、
のぼりはじめました。





どこまでもどこまでも、^{まめ}豆の木はのびていきました。
ずんずん、ずんずん、ジャックはのぼりました。

空の上には、まっすぐな道がありました。

そしてその先には、きよ大なおやしきがそびえ立ち、

とびらの前に、見上げるほど大きな女が立っていました。

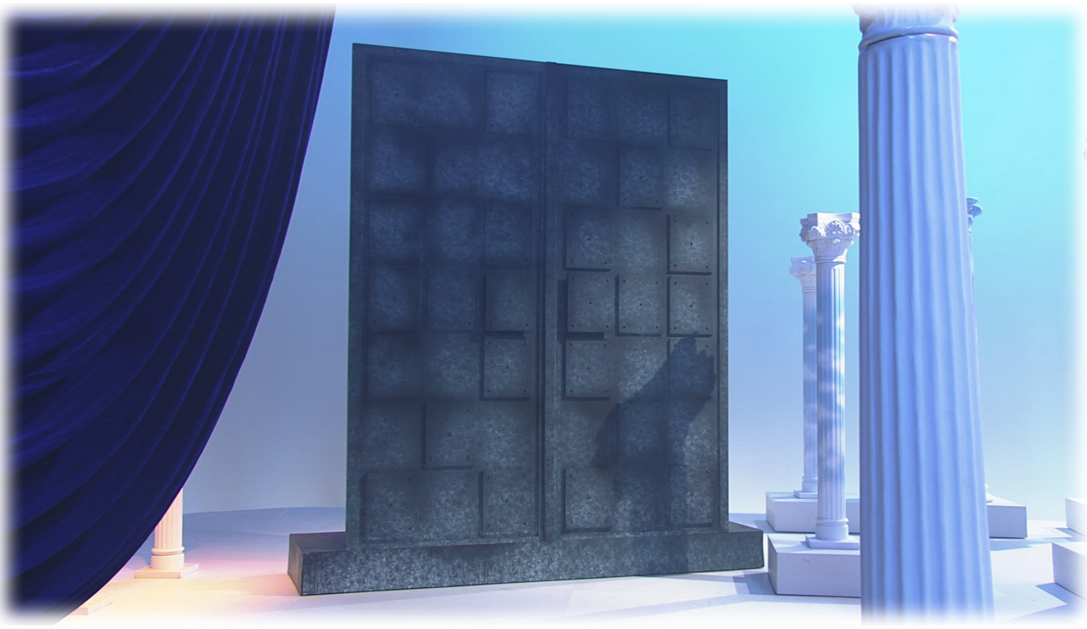
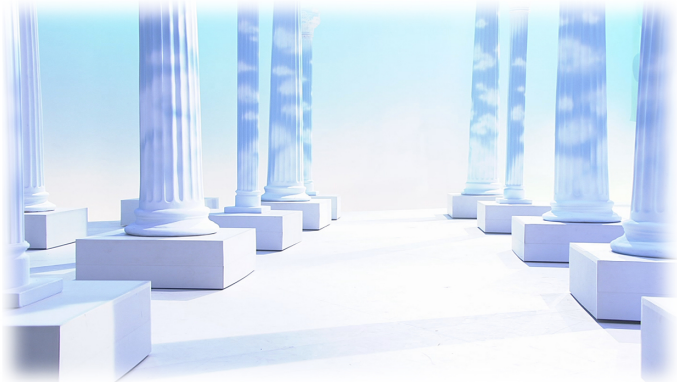
「おはようございます、おくさん」

ジャックはれいぎ正しくいいました。

「ぼく、おなかがぺこぺこなんです。

朝ごはんをいただけませんか？」

女はジャックに、パンとチーズとミルクをくれました。



ところがその時、どしん、どしんと音がして、
家ががたがたゆれはじめました。

「たいへんだ！うちの人が帰ってきた！」

おんな おお
女は、大あわてでジャックを
かまどの中にかくしました。

「じっとしてな。うちの人は、人くいオニなんだよ！」

人くいオニは入るなり、はなをならしました。



オ二は、大きなふくろをいくつもとり出しました。
そして、中から金かを出して数えはじめました。

ところが、そのうちごっくりごっくりしはじめて、
大きなびきをかいてねてしまいました。



ジャックは、そっとかまどをぬけ出し、
金かを一ふくろつかんでにげました。

そして、ふくろを下になげおとし、
豆の木をつたって、家に帰りました。

しばらくの間、ジャックとお母さんは、
なにふじゆうなくくらししました。

しかし金きんをつかいきってしまおうと、
ジャックはもういちど、豆まめの木きにのぼることにしました。

ジャックは、また、

オニのやしきにしのびこみました。

オニは、こんどは

めんどりをとり出しました。

オニが「生め！」と言おうと…

なんと、金のたまごを生みました！

オニがいねむりをはじめると、

ジャックは

めんどりをかかえてにげ出しました。

そのとき、めんどりが、

「クッククック！」と鳴きました。

オニが目をさました。

「めんどりはどこだ?」

とオニがさげんだそのしゅんかん、

ジャックは外へ、とび出していました。



めんどりは、ジャックが「生うめ！」と言いうたびに、
金きんのたまごを生うんでくれました。

それでもしばらくすると、

ジャックはやっぱり、空そらの上うへに行いきたくなつたのです。

この日、オニがとり出したのは、金のハープでした。

オニが「歌え！」と言うと…

ハープはひとりでに、

うつくしい音楽をかなではじめました。

オニはそれを聞きながら、またねむってしまいました。

ジャックはハープを

もちさろうとしました。



するとハープが大きな音で

「だんなさま！だんなさま！」と鳴りました。

ジャックはとうとう、見つかってしまいました。

オニが、ジャックのすぐ後ろうしを
おいかけてきました。



その時、豆の木が見えました。

ジャックはとびつき、するするとおりて行きました。
ハーブがまた「だんなさま！」と鳴りました。

オニも、豆の木にとびつきました。

豆の木がゆさゆさとゆれました。



家いえが見みえてくると、ジャックは声こえのかぎりさげびました。
「お母かあさん、お母かあさん！おのをもってきて！！」

ジャックはおのをつかみ、力ちからいっぱいふり下おろしました。

オニがぐらぐらとゆれました。

さらにもう一いっかい回ふり下おろしました。

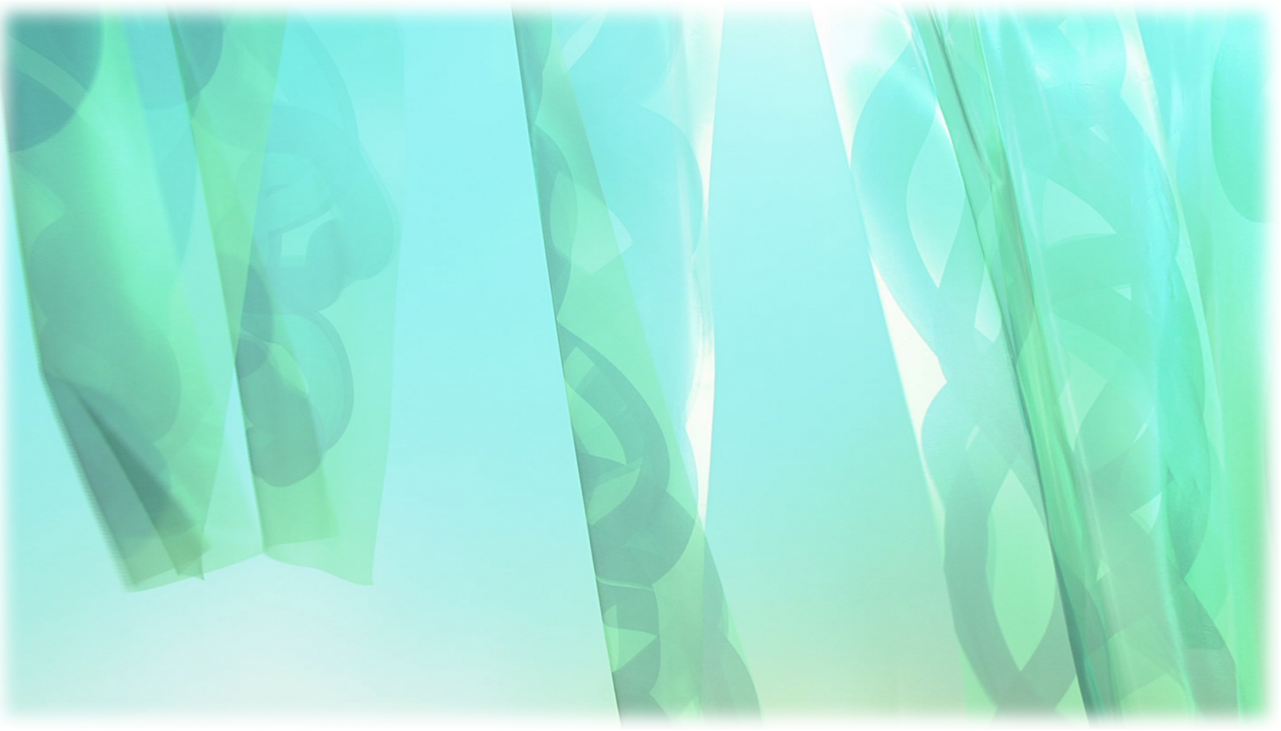
木きがまっぶたつに切きれ、

オニはまっさかさまに

ついらくしました。

その上うえに豆まめの木きが

バサバサとおちました。



こうしてジャックは、人くいオニをたいじし、
お母^{かあ}さんと、いつまでもしあわせにくらしめました。
めでたしめでたし。



おわり

